
農業物語～たった1人での農研～

栗花落 魍魎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

農業物語〜たった1人での農研〜

【Nコード】

N0541Q

【作者名】

栗花落 魍魅

【あらすじ】

東京の農学大学の3年生の主人公、『早坂明日香』は農業の仕事に携る夢を叶えるために農業研修に参加することにした。場所は鹿児島県の離党の小さな村に住んでいる榮^{さかえ}さん老夫婦が持っている畑で6ヶ月間、研修しに行くことになった。そこで少年、『津破^{つはこ}古陽輝』と出会って―。農業を通して始まる恋愛小説です。是非読んでみてください。

仲間たちの辞退

…嘘だ。嘘だ嘘だ嘘だ。

自分で何度も言い聞かせた。だけど、人生はなかなか甘く無いようだ。

「…早坂？」

「え？」

「聞いてた？」

「ごめん。な、なんだっけ？」

「だから、俺、農業研修に行くのやめるから」

な、なんですとー！ちょ、ちょっと待ってよ。…と言うことは、私一人で農研に行かなきゃいけないってこと？最初は6〜7人いたのに最終的には1人…？

「せ、先生にOKしてもらったの？」

「うん。長澤先生に言ったら即OKだった。ごめん。早坂1人になっちゃうけど…。」

今更そんな優しい言葉を言われても…。（怒）

「頑張れよ。おすそ分け待ってるからな！あはは。それじゃっ」
爽やかな笑顔を見せて、川原くんは友達の元へ向かっていった。

私は川原くんを信じてたのに！…あの日から。

2ヶ月前―

「私、農研に行くのを辞退します」

そう始めに告げたのは2年生の柚木（ゆき）ちゃんだった。

柚木ちゃんの家は経済面で少し苦しいらしく、農研を申し込んだ後に重労働だったお父さんが急に倒れてしまったようだ。

「仕方ないよ。お父さんを支えてあげて」

優しい井上くんは柚木ちゃんの肩を優しく叩いた。それなのに…。

「俺も農研、辞退する」

次に辞退したのはなんと井上くんだった。理由は分からないが、仲間内での噂では、夏休みを田舎で過ごすのはまっぴらだと、友達に話したということだった。

その後、次から次へと農研を辞退する人が多くなり、ついに私を含めて3人になってしまった。ちなみに、私と川原くん。あと、4年生の後藤先輩だった。後藤先輩は大の仲良しの人と農研のグループが違ってしまい、かなりのショックを受けていた。

「私…人見知り激しくてね…後輩達だけだと辛い…。だから、辞

退するね…」

いやいやいや！それはおかしいでしょ。私だって友達みんな違うグループだし。

しかし、後藤先輩はかなり落ち込んでいたため、私たちは仕方なく辞退を認めた。

「ったく。みんななんのための農研だと思ってんだよ！」

そう言ったのは川原くんで、俺は絶対辞退しねえとも言ってくれた。まさかの田舎先でのカップル誕生かと思いきや…。

こついった悲惨な結果になってしまったのだ。

明日香の決断

結局私は、１人になってしまった。なんとかして、他のグループに入れさせてもらおうと、私は川原さんの衝撃発言の後、すぐに長澤先生の元へと向かった。

「せんせえ〜」

私の声がよっぽど不気味だったのか、先生はビクツと驚いて振り向いた。

「ど、どうしたのかね、早坂くん」

「どうしたもこうしたも無いでしょう！？どういう意味ですか？農研が私だけって。大体、なんで先生はそんなに甘いんですか！？」

私はバン！！と机を叩いた。先生は小さく縮こまっていた。更に私は先生を追い詰める。

「ちょっとした理由で辞退するのをOKするっておかしいですよ！私、１人だけって無理ですよ？」

気づけば私は息が荒かった。先生はまあまあて両手を少し挙げて私を制御した。

「いや…すまんね、早坂くん。突然１人にさせてしまつて。でもね、みんな思い詰めた顔をして言ってくるもんだから…つい許しちゃつて」

先生は困った顔をして頭を深々と下げた。

「……。もういいです。じゃあ私はどこかのグループに入れさせて下さい。1人じゃ何もできないでしょ」

先生は目を泳がせて、顔色もやけに青ざめていく。

「どうしたんですか？」

「いや、それは無理なお願いなんだ。他はもう手続きを終わらせちゃってね。君が行く所だけでまだだったんだ。だから…無理なんだ」

ええええええええええ！！

ま、待て待て待て待て。何言ってるの、先生…（泣）私だけ…ガーン

「じゃ、じゃあ1人で離島に言ってこい……と?」

先生はいやにニコツと笑っていた。いや・・・苦笑顔の方が似合うような。私は一気に力が抜けてしまった。

「そんなあ……」

「本当にすまないと思っ
ているよ。ちゃんと引き止
めておけば良かった子も数
人いたし。だけどどうしても
断れなくてね。すまないが
……」

先生は本当に悪かったという顔をして頭を下げた。60近いお爺ち

やんにそんなに謝られちゃあ私も許すほかなかった。

「・・・もういいです。私1人で行ってきます。先生は自分を責めずに。っていうか、悪いのは辞退しないって言った人たちですから！ね？」

先生はホツとしたのか、満面の笑みを浮かべていた。すると、先生は引き出しの中から封筒を出して私に渡した。

「これは？」

「行き帰りの交通費が入ってる。君1人だけにおいておいて交通費を何も出さないのはさすがに可哀想だと思ったからさ。川原くんが辞退した後、私があらかじめ用意しておいたんだ」

「そ、そんな悪いですよ！私はバイトもしてますし、交通費ぐらい私が出します」

そう言つて、私は先生に封筒を戻した。しかし、先生は首を振つてまた私に渡した。

「良いんだよ。これは私のお金だし、君は研修費を出したじゃないか。いいから貰っておきなさい」

先生にここまで言われたことがなかったので、私は正直驚いたがこんなことも滅多にないだろうと思い、ありがたく貰った。

「ありがとうございます。是非使わせてもらいます」

「いやいや。私からのほんのお礼さ。君が1人になっても行つてく

れると言ってくれたから」

「まあ、夢は農業に携わることですからね。研修はやらないと」

そりゃそうだ。と、先生は感心するように腕を組んで頷いていた。時間を見ると気づけばもうすぐで昼休みが終わろうとしていた。

「じゃあ、私行きますね」

「ああ。出発は明々後日・・・だよな？」

「ええ。それが何か？」

「気をつけて行つてきなさいな」

先生はふくやかな笑顔を見せて手を振った。それはまるで大好きだった私のお爺ちゃんにすごく似ていた。もうだいたい前に亡くなってしまったけど・・・。

「・・・行つてきます」

私もつられて笑顔で手を振って、先生の研究室を後にした。友達が待っている場所へと向かうと、知枝（ともえ）と慶太、唯斗（ゆいと）がまだ居てくれた。

「おせーよ、明日香。もう終わっちゃまうぜ」

慶太が退屈そうに食堂の椅子に座っていた。知枝と唯斗は手を振っていた。

「ごめんごめん。川原くんと呼ばれた後、先生のところに行つたの」

「大変だったね。結局どうなったの？」

「・・・私1人で行くことになった」

知枝と唯斗はええつと声を上げて心配してるような顔をしてくれたが、慶太は腹を抱えて笑っていた。

「ウケるわー。お前1人がよー！せいぜい頑張れよ」

『かわいそー！』

知枝と唯斗は慶太に向かって反感した。それに慶太は2人を睨んでいた。

「うるせー！草食カップル！というか、唯斗キモいんだよ！女とウジウジしやがつて。草食男子か何だか知らねえが」

「は！？俺は草食じゃねーよ。大体、どこをどう見たら草食なんだよ」

「ひよろひよろ。やたら頭いい。服装が草食」

慶太は言葉を並べて、唯斗と言いつ争っていた。そんな言い争いを私は無視して急いでご飯を食べていた。知枝が心配そうに私に話しかけた。

「ねえ、本当に大丈夫なの？先生に他のグループは入れないか頼ま

なかったの？」

「どうやら、他のグループはもう申し込んだみたい。私も先生にそれを頼みに行っただけだね・・・」

知枝はそっかあ。と小さくため息をついていると、昼休み終了のチャイムが鳴った。私は残ったパンは後で食べようと思い、袋に入れた。

「行こ。授業始まっちゃうよ！」

「ケッ。お前が遅かったんだろうが！」

慶太は私にいちやもんをつけながら、次の授業への教室へと向かっていった。

ちなみに補足しておくが、慶太と唯斗、知枝は皆同じ農研グループで私だけ弾き飛ばされてしまったようだ。彼らは新潟県で主に米作りや野菜作りをしてくるそうだ。そして、慶太の気になる発言――

「うるせー！『草食カップル』！・・・（あと省略）」

実は、知枝と唯斗は付き合っていて実に6年だと言う。知枝と唯斗は中学から同じで中3の時に知枝が思い切って好きだった唯斗に告白したところ、両思いだったらしく見事付き合うことができた。

お互い喧嘩をまだ一度もしたことがないらしいのだが、この話はまた後ほど・・・。

旅立ち

出発前夜……。私は最後の荷物点検をしていた。今日、大学では裏切った仲間たちが口々にこう言っていた。

「野菜できたらちようだいね！」

「本当行けなくてすまないな。お土産、よろしくな！」

なんで皆お土産なんかを期待してるんだ……。？裏切り者に土産などないはずなのに……。(怒)

「明日香あ。準備できた？もう遅いわよ。明日、6時起きなんですよ？早く寝なさい」

「はい」

お母さんはニコニコしながら私の部屋に入ってきた。なんだか怪しい……。何かを狙ってるな。

「な、なに……。？」

「お土産は野菜でお願いね？採れたらすぐこっちに送ってちょうだい」

どっかーん！！

「ぬわんで皆そう言ってお土産を欲しがるのー！？」

「はあ？何言つてんだか。とにかく、採れたてのお野菜待ってるからね。おやすみ♪」

最後の『♪』はなに！？奴らにしろ、お母さんにしろ、皆遠慮つていう言葉を知らないのかな！？私がこんなだから？早坂なら何言つても大丈夫。みたいなの？私だって迷惑がることだったあんのよー！

なぜだか私はいつの間にか息が荒れていた。・・・あれ？このシーン、一回流れたよね？先生と話してるとき・・・。

「まあまあ。落ち着きなよ。アンタっていつもキレてるんだから。カルシウム足りないのよ」

「！？つて、なんだ未来（みらい）か。と言うか、いつもキレてるって何よ」

私の2つ上の姉、未来は一人暮らしをしているが今日はたまたま実家に帰っているところだった。彼氏さんの泰智（たいち）さんも来ていた。とつても紳士な人で大学のときから付き合っている。

「・・・で？今日は何しに来たの？」

「んまあね♪」

「出たよ。また♪だよ・・・。良い事でもあったの？」

未来は頬を赤く染めて俯いていた。私はその反応にすぐに気がついた。泰智さんと実家に来ている＝結婚話をしに来た！

「もしか・・・結婚？」

「・・・うん。さっきお父さんとお母さんと話し合っで。OK貰いました」

なぜか未来は正座で座っていて、私も正座で座っていた。とりあえず・・・。

「素直に、おめでとぅって感じだね」

「なんか冷めてない？酷いよー。姉が親に結婚しても良いって言われたのにその冷めようは」

「だって、もう目に見えてたじゃん。お父さんもお母さんも交際には大賛成していたし、泰智さんは優しいし、頭良いし。某有名企業に就職。何この、よくある漫画のパターンは！！？」

わけも分からずキレた私を未来は制御した。

「ほらー。またそうやってキレてえ。そんなんだからすぐに彼氏できないんでしょ？前の彼氏からもう4ヶ月かあ」

「私の話はどうでも良いから。大体、あの人は冷たすぎんの。頭いいのだから分らんが、冷めてて上から言われるのが一番嫌いな」

「はいはい。ってか、その大きい荷物は何？アンタ、ついに家出？」

私は大きいため息をついた。何を言っただか。まあ、一見家出っぽくも見えるけど、こんなに露出度の高い家ではどう考えても無いでしょうが。

「違う違う。明日から鹿児島に行って農研に行ってくるの」

「え！？かかか、鹿児島？と言うか、農研で何？」

「農業研修！いわゆる、教師でいう教育実習みたいなもんだよ」

「ああ。アンタ農大だもんね。農業研修か。ね、果物とか貰えるの？」

う。嫌な予感。

「果物はどうか知らないけど、私は主に野菜だから果物の土産は無いから」

「じゃあ、野菜のお土産！採れたらこっちに送ってよ。採れたてだよ。泰智と一緒に料理して食べたいから！よろしくね」

・・・もう、返す言葉がなく絶句していた。なんで皆野菜好きなんだろう。なんでなんで・・・。

「あ、それか芋焼酎！鹿児島といえばこれじゃない？私お酒好きだからよろしく。野菜と一緒にならもういいかな。ってあれ？明日香ー？」

私はもう姉の頼みには乗れないと思い、黙ったまま部屋から追い出した。もし、野菜の土産があるならば、泰智さん宛てに送ろう。そう決心した私であった。

結局寝たのは夜の１１時半。私は疲れていたのか、すぐに眠りについてしまった。

―出発当日。

ジリリリリリリ

目覚まし時計が鳴り、私はすぐに止めることができた。寝起きは悪いほうなのだが、今日は気持ちよく起きることができた。ただ、寝るのが遅かったため眠気は多少あった。

洋服に着替えた後、用意された大きすぎる荷物とリュックを持って階段を下りた。大きい荷物は階段の前に置いて、先にリュックだけ下に置いていた。

「おはよう。明日香。ちゃんと起きたのね。叩き起こそうと思ったのに」

「いや、そこまで子どもじゃないから。まあ、確かに普段寝起きは悪いけどね」

お母さんはふふつと微笑んで朝ごはんを作っていた。するとお父さんが眠そうな顔をして起きてきた。

「お父さんおはよう」

「おう。今日からだな。頑張つてこいよ。農業は大変だからな」

「うん。実際に農業の現場を見て感じて、夢に近づけるように頑張るよ」

お父さんは笑顔を見せて、テーブルにあった新聞を読み始めた。私はすぐさま大きい荷物を取りに行くために階段へと向かっていった。その大きい荷物は重過ぎて、階段を下りるのが精一杯だった。

「大丈夫？まあ、約半年だものね。それぐらいの荷物になっても仕方ないわね」

お父さんは心配そうに私を見てこう言った。

「何なら空港まで送るぞ？今日、午前中仕事休んでも大丈夫だし」

「ええ！？そんな悪いよ。お父さんは普通に会社に行つて。私タクシー使うし」

ここでお父さんのケチぶりが発揮される。

「バカ言え。タクシーだったらいくらかかると思ってるんだよ。大体俺はそこまで地位低くないんだし。任せなさい」

新聞越しにお父さんがニカツと笑顔を見せた。私はお父さんに恩にきります。と言って車で送ってもらうことになった。ここから空港まで約2時間半。意外にも遠いのだ。

準備ができた後、ついに家を出発する時間になった。お母さんが家の門まで見送ってくれた。

「それじゃあ、頑張つてね。ちゃんと頑張ってくるのよ。・・・お土産が貰えるほどにね」

「はいはい。頑張りますよ。それじゃあね」

私はいいい加減に答えながらも手を振って、家を後にした。

突然の見送り

私は車に乗り込み、早速出発した。振り向くと、お母さんが小さく手を振っていたので私も手を振っておいた。

空港まで2時間半と、かなり遠かった。久しぶりのお父さんとの2人きりで気まずいかと思ったが、意外にも話題に花が咲いた。小さい頃の話だったり、なぜか姉の話題だったり。

「未来はいい人見つけたよ。泰智くんはいい人だし、未来を大切にするって言ってくれたし」

「そうだね……。ある意味未来が羨ましいよ。絶対幸せになるって」

お父さんは笑って車に流れている曲を聴きながら鼻歌を歌っていた。曲はどれも80年代ばかりで私は全然知らなかったが、聴いていてなぜか落ち着いた。

「明日香も早く見つけなさい。・・・前付き合っていた彼氏も別れたしな・・・」

「ちよつとお。それ今更娘に言う？いいの？。前の彼氏とは価値観が違った。それだけだよ」

お父さんは更に上機嫌になったのか、口ずさむようになっていた。私が次に意識あったのはもう空港に着いていて、お父さんが私の肩を揺らしていたのに気づいた。

「明日香、起きろ。着いたぞ」

「……………へ？着いたの？」

お父さんは頷いたが今にも吹きそうな顔をしていた。

「な、何？」

「だって、明日香の顔すごいんだもん。ヨダレだらだら。お前、研修先でその顔見せるなよ」

え！？そんなに私酷い顔だったのかな……。恥ずかしい……。そんなことを考えていると、お父さんが後ろから荷物を取り出していた。私も慌てて外に出て、お父さんから荷物を受け取った。

「じゃあ、俺はここまででしか送れないけど」

「ううん。車で送ってくれただけでも十分助かったよ。ありがとう」

「おう。じゃあな」

「うん。行ってきます」

お父さんに別れを告げ、私は空港に向かって大きい荷物とリュックを持って入っていった。

中に入ると、最近改装が終了したとニュースで聞いた通り、すごく綺麗になった。お土産屋はもちろん、レストラン等もあってかなり充実していた。

「えっと、確か第2ターミナルだよね……。？」

突然肩を叩かれて、振り向くと川原くんだった。

「え・・・川原くん！！？」

私は驚いて目が丸くなった。川原くんは期待通りの反応だったのか、得意げに爽やかな笑顔を作っていた。一緒に来るのかと思ったが、荷物は持っていなかった。

「どうしてここに？というか、よく分かったね」

「先生に聞いたんだ。この時間に乗るって。だからいつ早坂に会えてもいいように早めに来てたんだ」

「そ、そうなんだ。わざわざ見送りに来てくれたの？」

「まあな。俺、早坂に悪いことしちゃったし・・・せめて見送りだけでもしないと」

川原くんの意外な一面を知って、またビックリした私であった。川原くんは、手を伸ばして私の大きなキャリアバックを持ってくれた。

「あ、ありがとう・・・」

「なんだ？照れてんの？早坂らしくないってーの！」

そう言つて、私の肩を強く叩いた。いやっ・・・その行為をされたら誰でも照れるでしょ！ましたや、恋人でもない人にそんなことされたら・・・。そんなことを思いつつ、第2ターミナルを目指した。

「奄美大島・・・だよな？鹿児島行きに乗るみたいだけど。鹿児島からどうやっていくの？」

「えっと、フェリーに乗り換えるんだ」

「そうなんだ。あれ？奄美空港ってあるよね？」

「そうなんだけどね。奄美空港行きの飛行機はあんまりないから、鹿児島↓奄美大島でフェリーで行った方が速いっていうのが分かってね」

へえ・・・と川原くんは納得したような顔をしていた。その後も他愛のない話ばかりであったという間に搭乗30分前だった。私は、航空券を買った。

「ちゃんと買えた？間違えて沖縄行きとかにしなかった？」

川原くんはニコニコしながら私をからかってきた。そんな彼の笑顔に癒された。

「バカ言わないですよ。確かに近いけど、さすがにそんな間違いしないですよ」

そろそろ荷物チェックをする時間が迫っていて、鹿児島行きの飛行機に乗る人がそろそろと並び始めていた。

「じゃあ・・・そろそろ行くね」

「うわ。その言葉、よくドラマであるパターンでしょ」

「い、いやそんな。全然意識してなかったんだけど」

「頑張れよ」

素直に川原くんが言ってくれたことが嬉しくて、やっぱりアンタも来るべきだよと一瞬思った。私は下を向きながら頷いた。そして

「・・・農研行けなかったこと、後悔させてやるから」

私なりの精一杯の甘えだった。それを聞いた川原くんは一瞬驚いたがすぐに微笑んだ。

「それじゃ!」

私は川原くんの返事を聞かないまま、荷物チェックのところへ向かった。川原くんがどんな反応をしたが分からないが・・・私がとにかく言いたかったのは、一人で農研に行かせるなつての!! だけということだった。

川原くんを振り切った私は、荷物チェックを難なくクリアして搭乗口へと向かった。

飛行機に乗るのは若干久しぶりで約半年ぶりだった。去年の夏休みに知枝たちと北海道に行った以来だ。

私は運もよく、窓側の席でよくはれた空が見えた。その10分後、飛行機は鹿児島へと滑走路を走り出した。

鹿児島へ

飛行機は離陸してから30分ほどで機体が安定し、ゆっくりくつろぐことができた。窓の外を見ると、見えるのは雲だけで、下を見てももう、特に何も見えなかった。キャビンアテンダントの人が順々に食べ物やお菓子、飲み物の販売を行っていた。

私はキャビンアテンダントさんが持っていた食品を見て、お腹が空いたのでお母さんが作ってくれたお弁当を食べることにした。いつもより丁寧に作られてあり、お米は私の好きな赤飯だった。おかずには卵焼きやベーコンのアスパラガス巻きだったり。長年私の弁当を作っているお母さんだ。どれも私が好きなおかずだった。

お弁当を食べ終わった後と暖かい空間にいたのか、私はいつの間にか眠ってしまった。自分でもただ寝るのが好きなんだと言いたいくらい、寝てしまふなと思った。耳につけたイヤホンから私の大好きな曲のサビが流れていた。

「・・・様。お客様」

「・・・ふえ？・・・あ、はい」

私はふいに起こされたので、また変な声を出してしまった。キャビンアテンダントさんは優しく起こしてくれた。

「お目覚めになりましたね。もうすぐで鹿児島空港に着陸いたします。安全ベルトと、電子機器の電源をオフにしてくださいませでしょうか」

私はキャビンアテンダントさんに言われ、サツと音楽プレイヤーの電源をオフにして、安全ベルトを着用した。それを見て、キャビンアテンダントさんは優しく微笑んで、ありがとうございます。と言った。足が長く、そして細く凛々しいキャビンアテンダントさんだった。

窓の外を見ると、青い海と鹿児島空港らしき建物が近くなるにつれて、大きく見えてきた。そして数分後、無事飛行機は鹿児島空港に着陸した。キャビンアテンダントさんのアナウンスが聞こえ、私はリュックを持ち、機体の外へと出た。着陸したばかりなのか、少しフラフラした。久しぶりの飛行機だったからな……。次はフェリーか。船酔いしそう……。そう思いながら空港の到着ロビーに向かった。

私は大きな荷物を受け取り、外へと出るともわんと温風が流れてきた。そうだ……。ここは鹿児島なんだ。よく晴れた空から照らす太陽は、東京よりも熱く照り付けているように見えた。荷物を持ったまま、次に乗るフェリー乗り場へ行くために、まず鹿児島市へと向かった。

鹿児島はやはり山が多く、バスの窓から見える景色の町並みの奥には山がどっしりと構えているように見えて、この鹿児島の自然を守っている。そんな風に私には見えた。バスに乗っている時間は40分くらい経っていたはずなのに、私には10分くらいしか乗ってないような気がした。

「次は、強天文館。強天文館でございます」

中年のおじさん運転手の声の低いアナウンスが聞こえてようやく私ははっと気がついた。バスを降りようとする、人がぞろぞろと前から降りていった。ほとんどの人がここで降りた。残りの人はほんの数人だけだった。

さて、ここからが本番だ。ただでさえ方向音痴の私は見知らぬ街で順調に行けば徒歩で約20分でフェリー乗り場に着く。しかし、迷ってしまう可能性が大なのが私なのである。すると・・・

「お姉さんや」

「ふえ？あ、はい？」

突然声をかけられて焦ったが、振り向くと70代ぐらいのお婆ちゃんで、1人だった。

「あのおー、『鹿児島新港』っていう所に行きたいんだがね、私よく場所が分からないんです。道案内してくれます？」

ええええええつ。いやいや、私がそれを聞きたいんです！（泣）
私は戸惑いながらもこう言った。

「あのお。私も今日が初めてフェリーに乗るんです。私も分からないんです。・・・ごめんなさい。むしろ私も分からないんです。方向音痴で・・・」

お婆ちゃんは困った顔をして、オロオロしていた。私も心の中ではお婆ちゃん以上にオロオロしてるんですけど！！

そこに、男の人が前に現れた。見かけによると地元の人のような感

じだった。

「どうしたんですか？フェリー乗り場分らないんですか？良かったら僕、教えましょうか？」

その人は年は40歳後半くらいだろうか。男前なサラリーマンだった。お婆ちゃんは一度、私を見て大丈夫かね？と目で合図したが、仕方が無い。行きましようという目で合図を返した。

「お、お願いします・・・」

私は小さくお辞儀をした。男の人は微笑んで、案内をしてくれることになった。

「お婆さんはどちらへ？」

「わたしか？私は屋久島さあ。一度はあそこに行きたいと思っててねえ！」

「屋久島ですかあ。いい所ですよ」

お婆ちゃんは笑顔をこぼして、更に行く気になったみたいだ。

「お嬢さんは、どちらへ？」

「えっと・・・奄美大島です」

「へえ！お1人さんで。1人旅行というやつですかね？」

男の人は顔に似合わずペラペラとよく喋った。これが田舎の人の良

さなのだろうか。気軽に話しかけてくれた。

「い、いえ。実は研修で・・・」

「研修？そうですかあ。どんなのですか？」

「農業です。奄美の村に大きな畑があつて。その老夫婦さんの所へ」

その瞬間、男の人は足をピタツと止めた。男の人の顔を見ると焦っている顔に見えた。

「いちゃしうまへ・・・？」

「え？なんて？」

「いちゃしうまへ・・・いちゅんんやつさー！！！！？」

もう何言ってるのか分からなかった。おそらく鹿児島の方言なのだろうが・・・。男の人は私の肩を掴んで揺らした。

「・・・。ごめんなさい。何でもないんです」

そこへおばあちゃんが口を挟んだ。

「もしや、今の言葉・・・沖縄の方言かね？」

「・・・え？鹿児島弁じゃなくて？」

「鹿児島弁はまだ分かるさ。沖縄の方言で話されると意味分からな

いんだよ。・・・そうでしょう?」

「ああ。そうです。私、沖縄の人間なんです。今は色々あって鹿児島にいますが・・・」

そう言つて、タオルで汗を拭きだした。男の人は、なんでもないです。と大きく笑つてまた歩き出した。・・・私は何か失言でも言ったのだろうか。それから、そのことが気になつて仕方が無いまま、フェリー乗り場へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0541q/>

農業物語～たった1人での農研～

2011年1月16日08時32分発行